

心

宗

慶次郎

岳

郎

御呼捨了願い  
ます



－ 1 －

母の呼ぶ声は聞こえてこなかった。

それでも目刺しだか柳葉魚だかの焼ける、生臭くて少し甘い匂いが団地の階段の踊り場を昇ってきた。

「トールン家、また魚？」

踊り場で一緒になって汗を流し、メンコをひっくり返していた誠が、子ども用のやや憐れな顔をして言った。

「オレが魚がいいって言ってるんだ」

「ふう～ん」

全くなんだか理解の出来ない、上級生の教科書を読み上げられているような顔をした誠が、階段を強烈に降りてきたカレーの香りと、妹の「お兄ちゃんのも食べちゃうよ」の一言に、猛然と階段を二段飛ばしで駆け上がっていった。

国鉄の線路沿いに建つ市営団地での夕方は、徹にとってそんな九歳の夕方であった。

－ 2 －

三つ年上の兄と一部屋ずつ与えられた北向の五畳の私室で、徹は世界史の年号を懸命に脳味噌とやら云う器官のどこかに刷り込ませようとしている。

マンションの火災警報器がけたたましい電子音を発するのではないかと心配になるほどに、秋刀魚の油が魚焼き器の電熱線に垂れ落ち、盛大な煙をあげている。

徹はキッチンに行き、母に声をかけてみた。

「警報機、大丈夫？」

「うん、電池取っちゃったからね」

無邪気に応える母に促され、テーブルに座ると同時に、立派に太った秋刀魚が二尾、徹の前に据えられた。

「直ぐ大根おろすから、身でもほぐしてて」

駅前に建つマンションでの夕方は、徹にとってそんな十五歳の夕方であった。

－ 3 －

中部地方を流れる大きな川の上流。

初めて徹が、或る程度マトモな形で交際をしていた女の子の郷里の実家の隣を流れる川。

水が流れてくる方を眺めると、大きな山が押し寄せてくるように思え、都会生まれの徹は下腹部がモゾモゾして落ち着かなかつたりする。

川の幅が広がるすこしだけ上流の早瀬で、彼女の両親が川に入って鮎を獲っている。釣ったりする訳ではない。文字通り素手で獲っている。

その少し手前の広くなりつつある川原で、彼女が焚き木になりそうな細い流木を拾っている。

「何してんのよおー、少しは働きなさい」

ただ唖然と大きな自然に呑み込まれている徹の居る辺りに、流木を抱えて戻ってきた彼女が頬を膨らませた。

「東京で生まれた男はホント役に立たないんだからあー」

文句を続けている割には瞳が優しげな彼女が、川原に転がっている石を器用に積み上げたり並べたりして、拾ってきた枯れ枝を上手に塩梅している。

彼女の両親が大きな笹のようなものに鮎を山盛りにして戻ってきた。

川に沈めておいた缶ビールを親父さんとあおり、女の子と元女の子が次々に焼いてくる鮎を頭からかぶりついている。

上流の向こうの山の、更にその向こうに、大きな太陽が沈んでゆく。

蒼いそらと碧の山を紅く染めていく。その手前を鮎を焼く焚き火のコケ臭い煙が白く通っていく。

セイシュンしていた夕方は、徹にとってそんな二十一歳の夕方であった。

－ 4 －

不景気になっていた。

それは徹だけのことでなく、勤めている会社が、いや、東京が・・・日本が・・・、或いは世界中が不景気になっているのかも知れなかった。

中途半端に役職を与えられ、定時をいくら過ぎていても手当の付かない残業をこなす毎日が続いている。

それでも、ときに、定時に仕事を終わらせられることもあったりする。

「あら、おかえりい、今日は早いのね」

起きている妻に出迎えられる時間に帰れた、そんなことだけで徹はほんの小さな幸せのようなものを感じたりする。

「――は？」

今年の春に中学校に通い始めた一人娘だ。

「六時からの塾に出かけたわ」

たまにしか居ることのできない夕方の食卓、家族三人での食事と云うのも難しいことなのか、徹は今さっき感じたほんの小さな幸せがスッと萎む思いがした。

シャワーを浴びて浴室から出てきた徹に、妻が栓を抜いたビールの瓶とグラスを渡してくれる。

「あなたはお魚でいいでしょ」

「ああ」

グラス一杯分のビールを一息にあおった後の溜息のようなものに声を乗せて応えた。

「レンジでシャケがもうすぐできるから」

妻はノートパソコンを引っ張りだして、何やらはじめながら言った。

徹が二杯目のビールのグラスに口をつけようとしたら、電子レンジが「チン」と鳴いた。

徹はグラスをテーブルに置き、レンジに立った。

レンジの中に、耐熱皿にのったシャケの切り身が加熱されていた。

温泉旅館のバイキングや、チェーンの牛丼屋さんの朝定食のシャケのようだった。

徹はそのまま電子レンジの扉を閉めた。

魚の脂の香りのしない、匂いのしない不気味なものは見たくもなかった。

テーブルに戻って残りのビールを呑みながら、四十を越えた徹は夕方に家にいるものではないと、そんなことを考えていた。

## 夕方

<http://p.booklog.jp/book/56872>

著者：宗岳

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/w244/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/56872>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/56872>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ